

武蔵坊弁慶

日本で最も伝説的な歴史上の人物である武蔵坊弁慶（1155–1189）は青年時代に圓教寺で暮らし、修行をした。弁慶は超人的な力で有名な僧兵で、多くの文学作品や歌舞伎に英雄的な人物として登場している。それらの中では弁慶はしばしば勇気と忠誠の典型として表現されている。また弁慶は短気で暴力的な傾向があることでも知られている。弁慶の学問に対する忠実な態度は、他の若い僧侶たちからのからかいの対象になった。

圓教寺で起きたと言われている特に印象的な事件がある。話によると、弁慶が眠っている間に、信濃坊戒円という僧侶が燭台の燃えカスの灰で弁慶の顔に不快な言葉を書いたという。弁慶が目覚めると、若い僧侶たちが嘲り笑った。彼は近くの井戸に走り、水に映った自分の顔を見た。顔を草鞋の底に見立てたその侮辱に激怒した弁慶は、寺の建物を激しく壊してしまった。この事件は、圓教寺の最も重要ないくつかの建造物を灰にした大火災を引き起こしたと言われている。事実であったかどうかにかかわらず、この物語は、日ごろ自分を映すために弁慶が使用していた井戸とされており、摩尼殿から開山堂に続く道にある。寺院には、弁慶に関係する他の品物も多く保存されている。彼の勉強机などは食堂の2階に展示されている。他には弁慶が練習したと言われている二つの大きなお手玉石がある。